

産業振興と教育振興の同時実現を目指して

——沖縄県島尻郡南大東村——

研究員 一瀬裕一郎

1 はじめに

本稿では、島で水揚げされる豊富な水産物から加工品を製造して漁業振興を図るとともに、その販売から得られる売上の一部を教育振興に振り向けている沖縄県島尻郡南大東村の取り組みを紹介したい。

2 加工品開発で地理的ハンデを克服

南大東村は、沖縄本島から東に約300kmの太平洋上に浮かぶ面積30.57平方kmの南大東島にある。村面積の約6割が耕地であり、そのほぼ全てでサトウキビが栽培されている。まさにサトウキビこそが地域産業の核であり、製糖、ラム酒製造、および農機販売等の関連産業まで含めれば、村内就業者の8割超がサトウキビ産業に従事している。

サトウキビの村である南大東村は、周囲に豊かな漁場を抱えた村でもある。島が天然の漁礁となり、マグロやサワラ、イカなど多くの魚が集まってくるのだ。しかし、消費地から遠いことから、これまで恵まれた水産資源を十分に活用できなかった。



南大東島の海鮮タコライス

するために、ハード面では2000年から南大東漁港が供用開始されるなど整備が進んでいる。その一方で、ソフト面では鮮度の問題をクリアし、付加価値を付けて村外へ販売できる水産加工品の開発が課題となっていた。

そのような折に、南大東村が内閣府の08年度離島活性化総合支援モデル事業に採択された。その事業を利用して、海鮮タコライスの共同開発が、村をコーディネーターとして、後述のように南大東漁業組合、三高水産、沖縄ハム総合食品、コープおきなわによって開始された。試行錯誤を重ねて開発された海鮮タコライスは、村内の子どもたちによる試食を経て、09年4月8日に発売された。

海鮮タコライスの製造・流過程は以下の通りである。南大東漁業組合が漁業者から買い取った魚を、三高水産がミンチに加工した後、沖縄ハム総合食品が最終製品を製造し、コープおきなわが販売するという流れである。

南大東村の仲田村長は、「村の産業はサトウキビが主体だが、南大東漁港が完成したこともあり、今回の海鮮タコライス開発など、今後は漁業振興にも一層力を注いでいく。同時に特産品を通じ観光振興も図りたい。」と話す。

3 本が欲しい—子どもの思いに応える

南大東村は、教育立村—人材をもって資源となす—という村是を掲げる。この村是を地で行くかのように、村の子どもたちは知的好奇心が旺盛である。例えば、地域づくりのNPO法人南大東Dongosabowsにおいて、子どもたちが来村した自然科学系の研究者らと交流を深めている。子どもたちはNPOの「子どもスタッフ」として、研究者に村内を案内す



島唄を披露する子どもたち

るなどして、郷里の自然環境への理解を深めている。04年には沖縄大学地域研究所主催のジュニア研究支援に参加し、自分たちの調査結果を、大学の教室で一般の人々に対して発表した。そのような機会を通じて、子どもたちは地域への愛着を一層強くしている。

また、子どもたちは村の自然環境だけでなく、文化にも関心を持っている。村には八丈太鼓を源流とする大東太鼓や、琉球文化の流れをくむ島唄など多彩な郷土芸能がある。子どもたちは、日頃練習を積んだこれらの郷土芸能を、祭りやイベントで披露している。

このように知的好奇心に溢れた子どもたちは、当然ながら無類の本好きである。それゆえ、村の子どもたちの国語能力は、沖縄県の市町村の中でも極めて高いという。しかし、残念なことに、村には書店が1軒もない。子

どもたちが本を買えるのは、沖縄本島を訪れた時か、沖縄本島の書店が出張販売に来村した時に限られる。このような本を買える数少ない機会に備えて、子どもたちは普段から図書券を貯めているという。

本が欲しい—子どもたちの思いに、海鮮タコライスの販売を通じて応えられないか。そこで考え出されたのが、村の要請に応え、1袋の販売につき2円を図書購入費として寄贈することだった。海鮮タコライスは発売以来25,000袋を販売した。それを一区切りとして、09年7月25日に、コープおきなわ牧港店で催された南大東島謝恩フェアで、図書購入費の寄贈セレモニーがにぎにぎしく執り行われた。

図書購入費を寄贈したコープおきなわの大城副理事長は、「現代っ子である村の子どもたちがゲームではなく、本を欲していることに感動した。今回寄贈した金額はわずかだが、小さな成功でも取組みの継続につながる大切な第一歩だ。海鮮タコライスは、漁獲量の増加を通じて、村の漁業振興に寄与するだろう。地域にその活性化に本気で取り組む人材がいれば、このような地域に貢献できる取組みに対して協力を惜しまない」と話した。

4 おわりに

南大東村の海鮮タコライスの開発・販売は、短期的には漁業振興を通じて村の経済を活性化させるが、効果はそれだけにとどまらない。図書購入費の寄贈を通じて、長期的には村の将来を担う人材の育成にも大いに寄与するだろう。

< 参考文献 >

- ・東和明『南大東島 これからの100年—どんごさぼーずの挑戦』(2008) 沖縄大学地域研究所ブックレット6(叢書第14巻)
- ・中井精一・東和明・ダニエル・ロング(2009)『南大東島の人と自然』、南方新社
- ・南大東島役場産業課(2009)「さとうきびは島を守り島は国を守る」
- ・南大東村「村勢要覧」(2004)

(いちのせ ゆういちろう)

(注1) 沖縄電力と南大東村などが出資・設立した(株)グレイスラムが、ラム酒を製造・販売している。詳しくは『週刊東洋経済』2004年9月4日号参照。

(注2) 南大東島役場産業課によると、就業者942人のうち786人がサトウキビ産業に従事。

(注3) 漁業組合では漁獲量を需要量に合わせるために、「生産調整」と称して、漁業者から買取る量を制限している。詳しくは中井他(2009)を参照。

(注4) タコライスは、タコスの具である挽肉等を米飯に載せた沖縄料理だが、海鮮タコライスでは挽肉に代わり魚肉のミンチを用いる。なお、海鮮タコライスはネット通販でも購入できる。

(注5) 子どもスタッフの詳しい活動は東(2008)を参照。